

出航して波の上を静かに船が走るが、来る日も来る日も船端に砕ける白波が続き、玄界灘を走るときはサメが並泳していた。

八月七日夕刻、関門海峡を通り瀬戸内海を航行して大阪港に入港、国防婦人会、愛国婦人会など大勢の方々の出迎えをうけて天王寺の大阪日赤病院に入った。生還を予期せぬ内地に感ひとしおであった。落ち着いて軍事郵便で田舎に知らせると、父が早々に見舞いに来てくれた。

昭和十七年九月十六日、原隊の隣にある岐阜陸軍病院に搬送された。同年十二月二十日現役免除、退院、除隊、予備役編入となったが、昭和十九年五月十一日、臨時召集されることになる。

## 我が主計戦記

山梨県 守屋 高德

昭和十七（一九四二）年一月、経理部見習士官として江戸城田安門を通り第七中隊橋本隊に至る。連隊長鵜飼大佐、河田旅団長、近衛師団長豊島中将、連隊は明治七（一八七四）年軍旗拝受。皇太子隊付二代「日嗣の皇子の畏しこくも 在せし誉れいや高く……」と連隊歌にある。現在の武道館の場所は、将校集会所で明治建築の粹、赤れんが石造り、銅うろこ葺きの近衛師団本部がある。文化財として現存する。

連隊本部前に大理石の御立台があり、皇太子（現天皇八歳）が御立ちあそばす。教練、乗馬等過密で日のたつのも忘れるくらい、一日も早い教育期間の終了を待つ。同年三月末、陸軍主計中尉に昇任、従七位に叙され、経理学校に分遣を命ぜられる。

経理学校の履修科目はやたらと多く、寝ずに読んで

も読み切れない。中でも戦術と作戦給養が大事で、これさえマスターすれば卒業出来ると。戦術は男爵安東中佐で風格あり、現地戦術の指導は見事なり。建築学は東大総長内田博士で熱心、時間いっぱい、一分も残さず講述す。後年文化勲章を受く。

同期七十三人のうち東大二十四人で三分一を占める。うち四人は一高出、一人は高文外交科試験合格でビルマで戦死す。同期生戦死者十人、東大七、京大二、神戸大一、優秀の人死するなり。中曽根康弘氏曰く「海軍で優秀の者死し、凡人の私が残る」と言われたが、陸海共同じかとの感があった。

昭和十八年三月、第十二軍経理部員を拝命、中国山東省済南に赴任。四代目喜多中将（後大将）、経理部長養田主計少将。私の仕事は経理部本来の業務でない、対日還送物資の調達、押収財産（敵性財貨）の処理、作戦時の軍需集積、補給業務、占領地における経済行政等である。作戦時の軍需集積、補給以外は軍人でなくても出来る仕事だ。

その頃、戦争目的が経済戦の様相を呈し、資源獲得が主眼となってきた。北支の兵站基地的使命と言われるごとく、北支軍においても対日還送物資の調達が第一義的となってきた。当時の日本はインド、エジプト、米棉が入らず、民官の需要は北支棉花に頼らざるを得ない状況であり、需要量は無限であった。羊毛も同じ、皮革（原革）も同じ。

棉花の主産地は軍管内臨清地一帯である。臨清から済南に運河あり、曳舟で棉花を運ぶ。済南に打包公司あり、七階建てくらいの巨大工場で一階から七階へ風力で吹き上げ、多量の棉を各階毎に逐次圧縮を重ね、一階で英国製圧縮機で十二本の鉄帯で石のごとく緊結し、一個の重量一〇〇キロと聞いた。青島港に五千トンクラスの船を待機させ、貨車輸送を行う壮大なる作業だ。調達は軍が直接行うのではなく、三井、三菱、兼松、大倉、日棉、東棉の商社をして収買せしめる。

華北皮毛統制協会があり、商社は統制会社の傘下にあった。調達促進のため統制協会員、幹部社員で構成

する一団に私が入り、警備兵三個分隊をトラックに  
乗、各県を訪れ、あらかじめ割り当てがしてある計  
画の、その達成の度合い、促進、達成困難なる理由、  
対策等を協議する。実際は県に日本人補佐官が常駐し、  
実権はこの補佐官にある。

中国の行政区は小さく県人口十万前後が普通だ。会  
議は知事、補佐官、幹部十五人程度。産業科長が主  
役。管内治安地区に百数県あり、一日に二県くらい回  
るため大変である。会後宴席を強いられ、地酒がで  
る。酒の飲みくらべ、酒のすすめ方がうまく、断わる  
に苦労する。クリスチャンだと言えばすすめぬ。キリ  
スト教徒は禁酒していると一般に考えているようだ。

臨清県は棉作地で農民慰勞の催しを劇場で行う。二  
階席があり、こんな立派な劇場があるのに驚いた。私  
が講演す。日中は「同甘同苦」日本は米英と戦い皆様  
は物資供給の後方支援をという要旨である。棉作農民  
と家族をいれ九割方が農民なのだ。戦前の日本も同  
じ。運河による棉花輸送は想像外の長距離で、中国人

ならではのエネルギーだ。同夜、日本料亭でベルシャ  
猫を見る。青き目を思いだす。博平、任平、清平、東  
昌、曹州、曲阜、孟県、高唐県では補佐官が言う「知  
事は匪賊上がりだ」と。見れば小男細身、どこにその  
ような力があるのか。城門のところに生き埋めの刑に  
したとか、首まで土に埋もれていたであろうが見たよ  
うな見なかつたようで記憶ははっきりしない。

曲阜県では知事・孔令焯に会う。孔子から八十数代  
の子孫とか、容姿端麗の好男子で文化人の感あり。書  
をいただき内地に送ったが、見せてと言う人多く渡し  
ているうちに失う。孔子廟見事。各県に県城あり、れ  
んが壁で色は灰色、赤色はなし。高さまちまちなる  
も、十五メートルくらいは普通である。城内は東西南  
北数キロあり、上に楼閣存す。四隅に楼のあるものあ  
り。保安隊、警察が警備し、出入りをチェックする。  
所持品も検査する。城壁を築くは難事なれど欧州も日  
本も中世後期、城を築くは同じで、それだけの事情は  
あったであろう。孟県は孟子の生地、「孟母三遷之教」  
たる看板が立つ。

兗州は禪宗臨濟宗祖臨濟義玄の生地、尋ねる暇なし。

昭和十九年二月、河南作戰（大陸從貫鉄道打通作戦）行動開始。鉄道第六連隊を基軸とする架橋部隊は敵霸王城陣地からの砲撃下にあつて、三千五百メートルの長大鉄橋を、列車も戦車も通る甲橋を黄河水上船からの作業で架橋する。難事中の難工事である。日本の橋梁技術の高さを示す。作業に従事せる苦力日に千余人、苦力の逃走防止には要所に輕機を配し火線を構成す。重ねて有刺鉄線で柵を巡らし、犠牲者数千に及ぶと言う。

河南作戰のため軍需集積始まる。陽動作戦上、黄河北新郷から西方七〇キロの地、清仕鎮駅東西の広場に約七千トンを集積す。軍は河南作戰に当たり四個師団、戦車一個師団、七旅団、騎兵旅団兵力十四万、馬三万頭、自動車六千両、砲二百五十門、右に伴う集積であるから膨大で、主食、副食、加給品、患者食、根菜、馬糧、衛材、獸材実に多種である。作戰にこのよ

うに物資を要するのだから容易ならざること。若くしかも常時異常神經の毎日だから上からの命とあらばさほどに思わず仕事をこなすものだ。

清仕鎮の集積を終え、兵を残し、主集積所九村鎮に赴く。これが膨大で気が狂うほど送られてくる。三十三トン貨車三十両くらいを一列車として一日五列車もくるのだ。それが一週間も続くのだから、よくも物があるものだ。これでは日本もたまつたものではない。大戦とは申せ一會戦のためである。防空上集積品を家屋に収納し在支米空軍の目からそらす。同時に雨も考えねばならず、減多に雨はないが、このために庄村鎮全体の家屋の強制収用する。語れば尽きず、家を取られても勞務者となりて男は全員と言うほど集積所の作業に従事す。農民の生活は極貧。

当所に辻參謀見える。參謀懸章をはずし、ほお骨高く小男、軍服よれよれ風さい上がらず、集積方針を聞くので混合集積と答う。ところが、集積状況を見てそのようになってないと言う。混合集積は一人分の方

品目を揃えて集積する方法で、爆撃に対処し、ある品目だけがなくなることを避けるため貴官の言うごとくされていないと、これはただものではないと気付く。掃り際総軍の辻だと言ひ残す。

亢村の集積が九分通り終わる頃、軍の經理勤務隊長を命ぜられる。編成は庶務、補給、物資収集、被服移動修理班二、衝材、獸材の六班、自動車一個中隊、輜重(輓馬)一個中隊、将校二〇人余、自動車約百兩、輜重車約百兩、行軍の長さは六キロに及ぶ大部隊。戰鬥部隊の進行に伴い補給点の前進、十四万の兵、三万頭分の馬糧は莫大で一日として欠かせない補給業務で難渋このうえなし。蹄鉄大小各種、蹄釘それに蹄鉄を焼くためのコークスが送られる。

黄河南岸に卸下せし酒、ビールは爆撃で破損し、流れて小川のごとく、煙草一億本は行先不明となる。一億本は日本人に一人一本の割、五千本一捆だから二万箱、これが無いというのだ。結局、貨物廠がどさくさに乗じて員数合わせと分かる。収集班の行動や成果に

ついて語るべきこと多し。されど紙数限らる。収集品目多種多岐。

禹県にては漢方薬七、八十車両の成果あり。禹県は堯、舜、禹の皇帝の生地とされ、黄河治水に功ありし聖王である。街の家並み整然とし、しかも立派で重厚感あり、川あり水清く、兩岸に柳。また薬種商多し、日本の富山とか。葉煙草は許昌にて収集する。許昌は米、葉煙草の栽培では中国随一で南洋兄弟公司の倉庫数棟に収蔵す。押収のうえ青島順中公司に送る。貨車一個列車、莫大な量なり。工場も巨大。もと英米トラストを軍が接収す。発酵工程ほか全自動で工場に入ればチョコレートの香りが濃醇で心地よさに去り難い思いがする。

主要金融機関の接収であるが中核は河南銀行である。人は逃亡していなく、紙幣(老票)は持ち去られて金庫は空。時にあるがわずか。苦力「洛陽看々」で古都洛陽を見たいの一心である。同胞攻撃にも別段気にせず物見遊山の体で、中国人の国家意識の欠如に

驚く。河南の地は古来中原で、中原を制するもの中国を制すと言う。黄河の南に位置し、沃土に恵まれ、北に比し作物多収穫地帯である。小麦一つにしても華北二尺弱、河南三尺、山東済南周辺の麦は矮小で、南下して徐州に至れば三尺もあり、麦の穂は馬の胸に届く。徐州を西進し鄭州に至り、西安の手前黄河の南、漢口の北に位置する広大な地で「中原に鹿を追う」という天下の覇権を争うの要地である。後漢、魏、西晋の首都洛陽あり北宋の都開封、鄭州、南陽、許昌を主要都市にす。

洛陽攻略戦は天長の佳節を期したるも、雨多く、道はぬかるみと化し、戦車師団の進出は遅延、敵の地雷、速射砲による損耗あり。雨で泥土となり行動出来ず。野重また同然。昼は在支米空軍に悩まされ夜間行軍となるが、砲車めり込み、馬滑りて如何ともし難し。騎兵部隊は洛陽西南方五十キロの地、長平鎮に達し、敵軍の退路を遮断す。

五月二十四日、総攻撃開始。二十五日、攻略成る。

敵は精銳第一戦区湯恩伯軍第四十三師団で西安方向に敗走す。洛陽攻略に当たり軍司令官から部隊に「史蹟保存に万全を期するよう」命令の伝達あり。ために龍門石仏、白馬寺等今日に残る。攻略の途次、大別山脈を越え下り坂にかかるころ敵機の攻撃を受く。兵軽機で応戦、馬のすぐ近くで馬驚きて竿立ち、私は落馬す。その折、水筒へこむ。幸いに損害なく行軍に移る。

程なくドラム缶数本を積み、ドラム缶にしがみつく兵二人。火の海で火炎しきりで、数本のガソリンは容易に燃え尽きぬ。兵は火焰の中、これぞ地獄の火の車。左手片手で合掌する。非情だ。

洛陽に入ったが、まず部隊に補給が第一。同時に都市周辺の農村には必ず菜園がある。この大軍が通れば青い物は食べ尽くす。イナゴの襲来と同じ。だから菜園を確保し農民に安心して栽培させねばならない。でない野菜は皆無となる。乾燥野菜だけとはいかない、野菜は欠かせない。部隊は通過地で、わずかの駐留でもその地および周辺で肉、卵、野菜を入手する。

銃による実力行使だ。農民も心得たもので荒されては困るから、部隊から必要量の申告を受け、極力住民が提供する形をとる。そのようなことが数日で行われるのだから驚く。よくしたものだ。

全部が全部うまくいくわけではない。六月初め小麦収穫期、昼は黄金色の畑も一夜明ければ刈り取られる、夜中の作業である。山川主計中佐「刈る人もなしただ戦場の麦うるな」の詩、麦は刈り取られているのだ。

河南作戦後の占領地に親日政権樹立がない。軍が直接行政を行う。軍政部長に特務機関長大佐が就任した。敵性紙幣の流通、所持を禁じ、違反者処罰の布告を街の要所に張る。法幣との交換比も明示する。経理部は兵站市場を開設し、生活必需品を置いて、我が紙幣持参者に販売する。流通の実績を示す。穀物、小麦粉、塩、綿布と極めて品数は限定する。占領直後とはいえ、貨幣なくして済むものではない。物々交換にも限度がある。そこで銀行を開設、住民の要求に応えねばならない。これは軍政部の仕事だ。

鄭州に巨大製粉工場あるも戦闘で操業休止、従業員逃走、だが再開せねばならない。従業員の復帰、生活保証、タービンを回す石炭の確保、何一つとつても大変な仕事である。占領して何の価値があるのか。大陸縦貫鉄道打通、これにより南方資源を内地に輸送するという気の遠くなるような話。しかも多大の損耗をした。損耗分だけでも運ぶことが出来るのか。しかも原料だ。消耗せしは製品だ、勘定が合わぬ。それは今にして思うことで当時は無我夢中、批判なしでただやるだけであった。

昭和十九年九月、大尉となる。仕事は河南軍政区における経済行政で、なかならず経済開発に伴う諸問題だ。満州国の経済開発の実施状況を参考と考え、高田源清博士著「満州国策会社法論」五百余ページの大著を読み、河南経済開発の指針と考え、満州国と河南との経済の実相の相違を比較考量するも、中国経済の現段階の経済史的認識を要することなるも、如何にすべきや、思考混乱して勉強せざれば処置不能である。だ

がそのような時間がない。事は明日にもやらねばならぬのだ。

参謀は北支に倣い国策会社案を示す。すなわち北支那開発綽である。だがこれは議会の協賛を要する。そんな大げさな、しかも法案を作成するなど不可能の事。現に河南に来てゐる商社をして物資を収買せしむる。商社は進出前に敵地区に対しての商売ルートがあつて取引をしていたのであるから、従来のルートを強化すればよい。よくまあ頭が回るものだ。衣食住は軍任せ、自分で稼ぐ必要がないので専心全力仕事に打ち込める。だから出来るのである。

昭和二十年三月、帰徳在の南京政府の和平軍・張乱峯軍に至りアヘン一万両を受領すべしとの「軍作命J O号」を受命す。警備兵約三十人、開封禁煙局より内山補佐官、敵方物資取得商社員若干人を帯同し、トラックに分乗し張軍に赴く。軍参謀部より既に連絡済み。張將軍、牛財政部長はか若干幹部と会いアヘン(半製品)一万両を受領す。張軍に真島少尉指導官が

いたが立ち会わなかった。

受領後、兵は別部屋、我々は張將軍、牛部長ほか幹部で会食す。ホワイトホースがでた。このアヘンは柘城産で品質は二流である。牛部長は柘城の出で熱河、蒙疆、邯鄲物が良いと言う。

省都や主要都市には禁煙局があり、表向きはアヘン吸煙者を登録、漸次量を減ずることとする。だが実は払扱は日本人で、アヘン販売は朝鮮人で、家に日の丸の小旗を掲げているので、中国人は日の丸を日本の国旗と知らず阿片販売の目印や記号と思つていた。

ガダルカナル、ミッドウエー海戦、サイパン陥落等戦局我れに不利とならば、我が方の通貨は下落し老票との交換比も下がる。これでは物の収買、現地傭人の賃金の支払いは困難となる。もともと中国の経済は塩とアヘンだと言われ、これが分かれぬと駄目だと言う。アヘン阿片一両の値段は金と一定の比率において動き、塩、穀類とも常に一定の量と等価だと聞いた。彼らはアヘンは貨幣だと言う。中国軍閥の財源はアヘ



ン、これで兵員を養い、兵器、弾薬、被服、兵舎等を整える。

我が方勢力圏と敵勢力圏とは異なるが接点は灰色で、双方の通貨が流通する。戦況悪化で我が方の通貨は下落し嫌遠せらる。最終は使えぬことになる。そこでアヘンの貨幣性があるわけだ。アヘンこそ必要悪だ。貨幣は価値の尺度、権力によって流通する。戦況不利で貨幣価値の下落が如実に物語る。

昭和十九年秋以降、老河口を拠点とする米支空軍の活動からして老河口飛行場占領を企図、昭和二十年三月作戦開始、敵は胡宗南と季宗仁軍である。私は補給を主とし、併せてアヘンを南陽に運び、「南陽経済班」をして敵方の物資取得し商社に交付収買せしむ。棉花、羊毛、皮革、桐油、漆、水銀等、中には金の延棒も持ち込まれる。桐油容器（柳骨製不透水紙を内外に張り）、漆桶はドラム缶に詰め替えるなど作業は雑多である。敵方物資商社は五・一五の三上卓、笠松候補生など日本国籍喪失の者とか、いわゆる浪人組でこのうち「東泰洋行」は三上卓とか、一度会った気がす

る。

終戦となる。部隊は作戦前の駐屯地に帰還す。補給部隊は進攻時は後方、撤退時はまた後方であるが今度は危険だ。後に我が部隊がいないのだ。補給終われば即時撤退、アヘン残量を鄭州に運ぶ。処理は参謀部の指示を待つ。第五戦区劉峙軍・蕃国屏中将（日本陸士出身）は濟南捕虜收容所に收容される。重慶より山東に三民主義の宣伝員として派遣され軍に捕まる。兼勤主計であったから知り会う。別格扱いで将校宿舎の隣に中国少年兵を当番とし、食事も将校食、温厚な貴公子浅草旭川第二十六連隊付のころのこと話す。よって交渉は順調で、兵站施設の引き渡し物資も莫大である。しかし彼らに引き受けの能力なく収賄の国であり何でも三割方ピンはねる。これも戦争賠償の一部たらんと考え抵抗するがなかなか通らず。

その頃、アヘンのことを劉峙軍が知りたるようである。これは危険、中国の監獄に収監されたらたまる

ん。兵十万、居留民三千の帰還のため乗船地連雲港に先遣幕僚部を設置、高級参謀を長として私も部員となり鄭州を脱す。飛行機で逃げた。飛行機は既に日の丸を消され青天白日、飛行士は沢登軍曹で同じ山梨県人である。

乗船地における経理勤務中に軍未着。従来よりおる部隊、主に集結せる居留民約一万に対する糧食補給で軍の糧秣を与えるのだ。連雲より虚構駅に至る線路の両側教キロに野積みの八幡に送る石炭の山である。その引き渡しもある。数量の把握など困難で仕事に忙殺される。汚職の国柄実数量では受け取らず、とはいえ石炭実数そのものがつかめず推定量となる。

南陽は孔明「草廬三顧」の地、臥竜廟を保護するために鷹森司令官より賞せらる。

語るべきことも多きも紙教尽く。

## 北支山西省を北から南へ

宮城県 舞 巖 文 哉

先に同年兵の恩欠者の方より「平和の礎」の第十巻を送られましたので読ませていただきましたが、読んでいるうちに、また読み終わってから、まずこの体験記執筆者の方々が、軍隊当時の模様や行動、そして月日、時間等について明確に記載されておられることに全く驚きました。

ところが、この同年兵から「どうだ軍隊の思い出を書いてみないか」という連絡がありました。しかし皆さんの体験記を読んでおきまして、私には何も資料がないこともありませぬのでお断りしたのですが、再度ぜひにというお勧めで、「では思い浮かべ、また記憶を呼び起こして、ボケ防止のために」という気になり、書いてみることに同意したのです。何せ六十年の前のことで資料もございませんので、その内容につきまし